



2018. 5. 25

No.207

編集・発行人 樋口みな子

E-mail

minginga@agate.plala.or.jp

URL <http://www13.plala.or.jp/minginga/>

郵便振替「銀河通信」

02740-7-56535

(郵送年間1,000円)

## 草花が一斉に咲きだす北海道の5月です



山野の草木が芽吹く季節です。いつもの年より雪解けが早く、一気にカタクリやサクラが咲きました。今はライラックがいい香りで初夏を告げています。我が家のリンゴの花も満開で庭がにぎやかになりました。

写真は5月に咲いた花たち。左から時計回りでリンゴの花、大通公園のライラック、浦臼神社のカタクリの群落、シリパ山のオオカメノキ、自宅近くのスズラン、余市川沿いのサクラ並木とシリパ山、浦臼山のカタクリとエゾエンゴサク。



## 石牟礼道子さんを1000人が悼みました



2月に90歳で亡くなった石牟礼道子さんを送る会が4月15日に開かれ参加しました。主催は水俣フォーラムです。会場の東京・

有楽町朝日ホールは、全国各地から1000人が参加していっぱいになりました。クッキングハウスの代表、松浦幸子さんが早くに並んで、私の席も取ってくださり前の席に座ることが出来ました。

参加者みんなで黙祷を捧げ、石牟礼さんと縁の深い10人の方が思い出を語りました。

父を劇症型の水俣病で亡くし、自身も水俣病で苦しんできた漁師の緒方正人さんが、「人間とは何か、自分は何者なのかと悩み苦しんだ。チツソの責任を問ううちに、自分もチツソの工場にいたら同じことをしたのではないか、クジラも迷いこんでくるような海、生きものの世界から救われた。誰が一番分かってくれるのかと思った時、石牟礼道子さんだった」と語りました。その時石牟礼さんは「よう帰ってきたですね。命の世界に帰って来たですね」と言ってくれたことを明かしました。

詩人の高橋睦郎さんは、「苦海浄土」は大叙事詩であり、されく（魂が歩き回る）、のさる（天から授かる）、もだゆる（共に思い悩む）人であったと語り、他者の苦しみを共に苦しむことができる共苦の人であり、歓待の人だったと語りました。

どのお話も石牟礼さんの人柄が伝わって来て涙があふれました。

翌日は浅草散策をしてから、調布に向かいました。クッキングハウスに是非行きたいと思っていたのです。クッキングハウスの理念は「心病む人と共に、この街で豊かに暮らす」「安心して、自分らしさを取り戻せる居場所」「当事者としての誇りを持つ」「メンタルヘルスを共に学び、理解を広げる」「心優しい福祉文化をつくり、希望を発信していく」です。こんな考え方で30年間も活動を続けてきたのです。スタッフ、メンバー、地域の方たちがレストランにいらして、有機野菜の美味しいランチをみなさんと一緒に楽しみました。代表の松浦幸子さんの長年の取り組みに共感して、私も長い賛同会員です。皆さんとの別れを惜しみながら機上の人となりました。

飛行機上空から見た夕焼けが綺麗で、石牟礼さんが笑顔で見送ってくださったのかなと思えました。



## 市民がつくる平和～核兵器禁止条約を力に 川崎哲さん講演会



4月21日ノーベル平和賞を受賞した核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN）の国際運営委員、川崎哲（あきら）さんの講演会がLプラザ

でありました。（撮影・石井一弘さん）

日本も含め条約への署名と批准を各国に促し、核廃絶の機運を高めたいと意義を強調し「皆さんもSNSなどを通じてこの話題を広めてほしい」と呼びかけました。

授賞式で史上初めて被爆者が行った演説など、式の様子を写真で紹介。「核兵器は絶対悪」などと訴えた演説の原稿は川崎さんも共に作りました。外では被爆者がパレードするなど会場内外が熱気に包まれたといい「市民社会のみんながそこにいた。日本政府だけがいなかった」と皮肉を込めました。核兵器禁止条約を巡っては核保有国と非保有国が対立し、日本は唯一の被爆国だが、米国の「核の傘」を頼り条約に参加していません。「圧倒的多数の国は条約にイエスと言った。日本政府は少数派だ」と批判しました。

各国の条約批准を促進するための活動が必要だとし、核兵器の開発・製造に関係している企業への投資をやめるよう金融機関に働きかけることなど市民の関与も提案しました。

川崎さんはNGO「ピースボート」の共同代表として広島・長崎の被爆者と世界各地を訪れて核廃絶を訴えてきました。現在、世界に核は1万5000あるといわれています。広島や長崎に落ちた原爆だけではなく、核実験は、世界で2000回以上も行われています。その中でICANはあらゆる国がどんな場合でも、核兵器を持ってはいけないし使っていないという条約を作ることを進めてきました。みんな被害者になるのだから全員でやめなきゃいけないという単純な話ができるのは、国と国との力関係に影響される国家代表ではなく、市民代表だからと語りました。全面禁止の条約ができたことで、核兵器は絶対に悪いものというルールができたことと市民運動の成果を強調しました。

核兵器禁止条約は被爆者の長年の悲願であり、国際舞台では女性の活躍が目立ったとも語りました。

川崎さんは翌日はジュネーブで仕事。核兵器のない世界にしていくため東奔西走の活躍です。

北朝鮮が「核実験場の廃棄」を明言しました。南北首脳会議の成功をきっかけに、戦争が回避されることを願います。

川崎さんのお話から市民運動の大切さを再認識しました。

## 権力側が隠そうとすることを明るみに出すことが使命 望月衣塑子さん講演

東京新聞社会部の記者、望月衣塑子さんは森友・加計学園問題を取材。菅官房長官の記者会見で23回の質問をしたことで一躍時の人となりました。

4月29日、日本



撮影・石井一弘さん

ジャーナリスト会議北海道主催の講演会(会場かである2・7)は立ち見が出るほどの350人で埋まりました。

望月さんはとても小柄ですが、演劇で鍛えた大きな声で休憩もせず2時間、「進む政治の私物化 瓦解する官僚達—安倍政権とメディア」を語りました。

望月さんの記者としてのテーマは「権力側が隠そうとすることを明るみに出すこと」自分の五感を信じて、権力と対峙し、疑問や疑念が自分の内側で解消できたか、世界・日本の人々にとってベストなのか、と問いかけながら取材していると語りました。

望月さんは、安倍政権下で行われた武器輸出三原則緩和の問題などを取材する中で、検事や官僚が都合な情報を語ろうとしないことに気づき、「うそをつかれて当たり前」と粘り強くキーマンに話を聞いてきたと話しました。

また、加計学園の獣医学部新設問題を巡り「行政がゆがめられた」と告発した前文部科学事務次官の前川喜平さんや、性暴力被害を訴えたジャーナリストの伊藤詩織さんの姿に「見えない巨大権力に立ち向かっている人がいる」と感じ、詩織さんへもインタビューしました。顔をだして告発するのは権力を敵にまわすこと。被害者が泣き寝入りする社会をつくってはならないという詩織さんの使命感に共感。政治部記者に交じって菅官房長官の会見に出席するきっかけになりました。

講演の最後に紹介されたガンジーの言葉です。「あなたがすることのほとんどは無意味であるがそれでもしなくてはならない。そうしたことをするのは、世界を変えるためではなく、世界によって自分を変えられないようにするためである」。

まるで講演を聴いているような臨場感溢れるお話でした。権力監視がメディアの役割です。多くのジャーナリストも望月さんに続くことを願います。

私は最後尾で望月さんの書籍などを販売していましたが、会場が参加者であふれて会場外に出たため、後半はあまり聴けませんでした。話したことは多岐にわたりましたが、書き起こしは抜粋です。是非、望月さんの著書をお読みください。

## 元朝日記者の植村隆さんが韓国の「キム・ヨングン民族教育賞」を受賞



「ハンギョレ新聞」日本版5月14日付の記事全文を転載します。

日本軍慰安婦の存在を日本で初めて提起した植村隆元朝日新聞記者が、今年「キム・ヨングン民族

教育賞」受賞者に選ばれた。

キム・ヨングン先生記念事業会は13日、「日本軍従軍慰安婦の真実を知らせ、これに伴う弾圧に屈せず立ち向かっている植村隆記者に賞を与えることにした」と発表した。受賞理由は「日帝強占期(日本の植民地時代)に2回、1980年5・18(光州民主抗争)の際に1回投獄され、情熱的に啓蒙運動を繰り広げたキム・ヨングン先生(1917~85)の精神と、知識人であり教育者として責務を尽くそうと努めてきた植村記者の行動が通じ合っている」と説明した。

授賞式は15日午前11時、光州市治坪洞(チピョンドン)の光州学生文化会館にあるキム・ヨングン先生の胸像前で行われる。

植村氏は朝日新聞の社会部記者として働いていた1991年、日本で初めて、日本軍従軍慰安婦の存在を記事化した。5・18をはじめ韓国に関心を持っていた彼は、1990年から女性団体が提起した慰安婦被害に注目した。1991年には1941年に強制的に日本軍に連行された事実を韓国では初めて公開証言した金学順(キム・ハクスン)さん取材し、「思い出すと今も涙 元朝鮮人従軍慰安婦 戦後半世紀重い口を開く」という記事を書いた。

その後、日本の右翼の標的となった彼は暴力や脅迫、家族の安全まで危険にさらされながらも、所信を曲げず、著書『私は捏造記者ではない』(原題『真実 私は「捏造記者」ではない』、ブルン歴史出版)を通じて真実を知らせた。この過程で日本神戸松蔭女子学院の大学教授として採用されたにもかかわらず赴任できず、北海道の北星学園大学の大学講師を務めた際にも嫌がらせを受けるなど、試練を負わなければならなかった。しかし彼は記事に対する責任感に基づき、極右メディアに訴訟などで対抗しながら、教育を通じて次の世代に真実を伝えるため努力してきた。彼の著書は2016年10月、ハンギョレのキム・ユンヒョン記者の翻訳で、韓国版が出版された。アン・グァノク記者(お問い合わせはjapan@hani.co.kr)

名誉棄損裁判を不屈の精神で闘っている植村隆さんを讃える賞に、私たち支える会も感動しています。(写真は九州での講演です)

# 本 BOOKS



種子法廃止と北海道の食と農  
地域で支え合う農業—CSAの可能性

荒谷明子ら著 寿郎社1,728円

種子は国民の命と健康を守る公共の「共有財産」です。2018年3月31日で「主要作物種子法」が廃止され米や麦、大豆など種子の生産過程を、民間企業に委ねていこうとしています。決して一握りの企業が独占すべきものではありません。

種子法の廃止で北海道の食と農の在り方がどう変化するのか、農業者や研究者、ジャーナリストら10人が、さまざまな角度からとらえています。

第1部では自家採取をするなど種を大切にす三人の農家に種子法廃止をどうとらえているのかを語ってもらい、第2部と第3部では、種子法が果たしてきた役割と廃止に至る経緯、また外国籍企業が進める種子支配の中での廃止の意味をまとめています。

第4部では、これからの北海道の食と農をどう考えていけばよいのかを「地域で支え合う農業」であるCSA（コミュニティ・サポーター・アグリカルチャー）をモデルケースとして提案しています。

農業者の荒谷明子さんは、企業に種子をゆだねる怖さについて、種子の価格が安定しないのではないかと、少数の需要しかない品種を提供するのが難しくなるのではないかと、自社の農薬とセットで栽培する品種を開発する傾向が強まらないかと、と懸念しています。

荒谷さんの「足の下の大地に感謝し、慈しみをもって手入れし、大切な人たちの食べるものを育てていくことを続けていきたい。そして種子と物語を継ぎ、分かち合いながらつなげる世界の輪の一部になりたい」の言葉に農業者の思いが詰まっていると思いました。

安川誠二さんはあとがきに「種子や種苗は戦略物資である前に、私たちの命を育む大事な遺伝資源のはずです。その種子を失うと、二度とその命を次世代につないでいくことはできません。『種子はだれのものか』を皆さんと一緒に考えていきたい」と結んでいます。

私の母方の祖父母は淡路島から日高に入植した農民でした。米や野菜を作り馬や豚、鶏を飼う大家族の食を賄いましたが、たった一代限りで農業を終えました。各地で安全で美味しい野菜を作って、地域で支えあうCSAを守ってほしいと思います。



夜間中学と日本の教育の未来

埼玉に夜間中学を作る会・川口  
自主夜間中学編  
東京シュレー出版 1512円

2016年10月に「埼玉に夜間中学を作る会」と「川口自主夜間中学」が主催した「埼玉の夜間中学運動」31周年記念集会で、前川喜平・文部科学事務次官（当時）が行った講演録「夜間中学と日本の教育の未来」を中心に編集し、作る会代表の野川義秋さんが来年4月に埼玉県内初の公立夜間中学が川口市に開校することを踏まえた活動などを解説しています。

講演で前川さんはユネスコ憲章の精神に触れて「教育を通じて人の心の中の偏見や無知というものを無くして、お互いの理解を深めていくことによって戦争をする気持ちにならないようにする。政府間の取り決めだけでは平和は維持できない、人の心と心をつなぐことで初めて平和の砦ができる。それは教育の力だ」と述べ、「憲法3原則である基本的人権や国民主権、平和主義も教育が基礎になれば実現しないと思う。国籍に関わらずすべての国民は等しく教育を受ける権利がある」と述べました。その上で、「『等しく』は『同じ』という意味ではなく、一人一人に応じた最も適切な教育の機会を保証することだ」と語っています。

「一つひとつのマイノリティのことを考えていくことはマジョリティのことを考えていることだ」と語っているのがいいなと思いました。

ほとんど授業を受けず卒業証書を受け取っただけの「形式卒業者」や、義務教育未修了者、外国籍の子どもたちなどに学びの場を提供してきた「夜間中学」を前川さんはとても大事な取り組みだと深い関心を寄せてきました。それが退官後に「夜間中学」で教えることに繋がっています。

私も昨年、札幌で前川さんのお話を聴く機会があり、教育は権利だとおっしゃったことがとても印象に残りました。それぞれの状況に応じた学習の機会、教育を受ける機会を作っていくことが日本の未来を明るくするという前川さんの考えに深く共感しました。「埼玉に夜間中学を作る会」が30年以上も活動を続けてきたことにも感銘を受けました。活動を伝える通信が「銀河通信」というのも縁を感じました。そんな中で「川口自主夜間中学」が出来たのです。その取り組みも知りたかったです。札幌では公立の夜間中学はまだありませんが「遠友塾」が頑張っています。シュレー出版の発行人、小野利和さんから送っていただきました。

問い合わせは東京シュレー出版（03・5



### 武器輸出と日本企業

望月衣塑子著 角川新書  
864円

陸上自衛隊が、実戦形式の大規模訓練を担う専門部隊を北海道内に新設する方向で検討していることが新

聞で報じられました。集団的自衛権の行使を可能にした安全保障関連法に基づき、海外での危険任務の拡大が心配です。北海道もか？と衝撃を受けました。

本書は、勢いを増した、現在進行中の日本の武器輸出に関する微細な動きを、政・官・財・学とその連携の現場に取材して、その報告をしています。

取材の苦労について「企業ではテーマを伝えたとたんに電話を切られたり、門前払いされ、立て続けに取材拒否に遭い、関係省庁からは締め出しを食らい、防衛省の幹部には説教をされたりと、めげそうになったことも。それでも危機感や私と同じような不安感から匿名を条件に取材に応じてくれた経営者や従業員、官僚たちがいた」と書いています。

安倍政権は2014年4月に、武器や関連技術の海外移転・輸出を禁じていた「武器輸出三原則」を撤廃し、原則解禁に転換する「防衛装備移転三原則」を閣議決定しました。財界のかねてからの要求であったこともあり、政府の「成長戦略」の一つとして、武器輸出に積極的です。ところが防衛関連企業は世界の武器市場への進出に慎重な姿勢を見せていると言います。

2016年4月、オーストラリア政府の次期潜水艦の共同開発交渉で、有力視されていた日本ではなく、フランスが受注したのです。関係者には大きな衝撃でした。三菱重工業とともに受注競争に参加した川崎重工業の村山滋社長は会見で「防衛装備品を海外に売って商売をすることは今まで考えていなかった」と今回の交渉が政府主導だったことを明らかにしています。武器を持つのは「国を守るため」「抑止力のため」と言っても誰も「戦争をするため」とは言いません。ISによる被害は報道されますが、アメリカや多国籍軍による民間人への被害が多くあることはあまり知られていません。

2012年にパキスタン人少女ナビラ・レフマンさん（当時9歳）はアメリカの無人攻撃機による誤爆で祖母を失い、本人も右手を負傷したのです。ナビラさんは無人機攻撃の残虐性を世界を回って訴えています。

日本が武器を持つ国から、再び「軍事大国」化の道を突き進むことのないよう、市民はしっかりと政府のやることを見張る必要があると訴えます。

日本は憲法9条で、戦力の放棄、二度と戦争はしないと誓いました。それらを捨てて、戦争に加担するのは見過ごすことができないと警告しています。



水俣から  
寄り添って語る

水俣へ  
受け継いで語る

水俣フォーラム編  
岩波書店各1944円

水俣病を知ることでわかる、生活の中の政治のこと、偏見といじめのこと、人間の魂と幸福のこと。水俣の経験に学び、これからの生き方を考えるために最適な2冊の講演集です。

石牟礼道子さん最後の講演「まなざしだけでも患者さんに」（2013年）も収録されています。

私が一番印象に残ったのは宇井純さんの講演録でした。「水俣病がこんなに『巨大』なものだったということ。つまりわれわれが闘った相手は日本そのものだった」と語っています。20歳の頃、宇井さんの「公害原論」を東大講堂で聴いたことがありました。いっばいの人たちの熱気に圧倒されたことを覚えています。

また原田正純さんが地域を回って水俣病患者を発見していった話にも感動しました。

あとがきに「水俣の人々を襲った出来事は今でも過去にならない。そこに映し出されるのが、現在と未来の私たちである限り」とあります。是非、水俣病から学び、未来につなげていけたらと思います。



東日本大震災、福島第一原発事故  
ふるさと 福島を詠む

俳句・短歌 あげぼの会会員  
翻訳・写真・文 堀泰雄  
ホリゾン出版540円

前橋市の堀泰雄さんは元高校教師で、エスペラント作家として活躍されています。

今回、福島県の元教師らが詠んだ俳句や短歌に、堀さんが福島県で撮った写真と文章を書き、エスペラント語も併記したのが本書です。堀さんは、震災直後から70回も被災地に足を運んで、写真集などを発行してきました。

「復興の朝までどっこい生きてやる」「ふくしまの空に二筋の飛行機雲描いてくれぬか原発×と」「原発の弾けて群民飛び散りぬ」「セシウムを秘めて阿武隈の嶺眠る」などに原発事故で自然豊かな福島の大いなる大地や海が汚染され、住む場所を奪われた悲しみや怒りが込められています。

堀さんは「多くの方がまだ苦しんでいることを忘れないでほしい。原発のない日本、世界を作りたい。多くの方に読んでいただきたい」と記しています。堀さんは「銀河通信」の読者です。

問い合わせは堀さん027-253-2524へ

真実を伝える力

『タクシー運転手  
約束は海を越えて』

樋口 みな子



光州事件が起きたのは1980年5月。前年の朴正熙大統領暗殺から新軍部の全斗煥（チョン・ドゥファン）政権による、

非常戒厳令、クーデターなどが立て続けに起きた韓国の激動期、同国南西部の光州で民主化を求める20万人規模の市民デモに軍が発砲した韓国現代史上最悪の民衆弾圧事件です。

この事件を世界に発信したドイツ人記者ユルゲン・ヒンツペーターと、彼を現地に送り届けたタクシー運転手キム・サボクの実在の人物をモチーフに、あの日の真実が語られ、昨年、韓国で1200万人が観たという大ヒット作です。

妻を病気で失い、一人で11歳の娘を育てるタクシー運転手のマンソプ（ソン・ガンホ）は滞納した家賃を払うためにドイツ人記者ピーター（トーマス・クレッチマン）をタクシーに乗せます。ここでのマンソプは正義感溢れる人物ではなく、単に大金にひかれて光州までの仕事を引き受けたひとりのタクシー運転手にすぎません。

検問や渋滞を切り抜けてたどり着いた光州で、軍部圧政に怒り、民主化を求める市民デモの輪は大きくなる一方でしたが、軍は彼らを暴徒とみなし容赦ない銃弾を浴びせました。私もその場にいるようで震えあがりました。市民や学生を守ってはくれない軍隊に驚き、事実を伝えない韓国メディアに、マンソプと同様、私も激しい怒りを感じました。



危険を顧みずカメラを回し続けるピーター、面倒見のいい光州のタクシー運転手、音楽好きの明るい大学生らと共に行動するなかで自国の政治状況に無関心だったごく普通のマンソプが変わっていきます。しかし

娘が心配なマンソプは急いで戻りかけます。その途中ふと目にした韓国の新聞には、圧政に抗する人たちとは書かれず、暴徒に発砲して数人が死亡と報じられていたのです。今、自分がすべきことは何かをマンソプは知ります。事実を世界に伝えなければ。あの記者をソウルの金浦国際空港に送り届けられるのは自分だけではないのか。Uターンするマンソプ。この時の表

情が秀逸。傍観者から当事者へ。彼の決意が心に迫りました。

戒厳令下、まるで指名手配状態の記者と空港への道中はスリル満点。検問所でこの記者と察しながら通過させた兵士に助けられました。これは実話だとチャン・フン監督は明かしています。バレたら重罰ですが軍の中にもこのような若者がいたことに感動しました。

暴走する権力の恐ろしさ。真実を伝えることだけが、それを止める力を持つのです。



この映画には英雄は一人もいません。市民の目線で光州事件をリアルに伝えていて、ソン・ガンホの巧みな演技が圧巻でした。

日本ではこんな映画ないです。

2年前に観たソン・ガンホ主演の『弁護人』を観たときも1980年代の民主化運動が今に生きているのを実感しました。こういう映画を製作できる韓国に「日本はどうなの？」と問いかけられたように思いました。

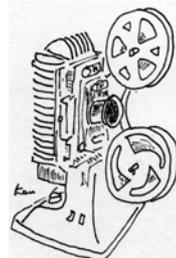
チャン・フン監督作品

©2017 SHOWBOX AND THE LAMP.  
ALL RIGHTS RESERVED.

（シネアスト 札幌映画サークル会報  
2018年6月号掲載）

ペンタゴン・ペーパーズ  
最高機密文書

スティーブン・スピルバーグ  
監督



ベトナム戦争が泥沼化し、アメリカ国民の間に疑問や反戦の気運が高まっていた1971年、政府がひた

隠す真実を明らかにすべく奔走した人たちの姿を描きます。

ニクソン大統領政権下の71年、ベトナム戦争を分析・記録した国防省の7000枚に及び最高機密文書＝通称「ペンタゴン・ペーパーズ」の存在をニューヨーク・タイムズがスクープ。政府の欺瞞が明らかにされます。4代にわたる大統領が隠し続けてきた文書です。女性新聞発行人であるワシントン・ポスト紙のキャサリン・グラハム（メрил・ストリープ）と編集主幹ベン・ブラッドリー（トム・ハンクス）らが、国防総省がベトナム戦

争に関する分析を記録した“ペンタゴン・パーズ”の存在を知り、社運と記者生命をかけて、真実を世に発表しようとしています。

政府の圧力や、社内の反対意見にも屈せず、メディアが政府に真っ向から立ち向かう多くのシーンに臨場感があふれています。最初は頼りなく感じられた新聞発行人のキャサリンが、しだいに信念を貫く気骨ある女性に変わっていく姿に共感しました。

報道の自由を守るために奔走した新聞記者たち。輪転機にゴーサインが出たときには、感動で胸が震えました。国民の『知る権利』を守ることに繋がったのです。ワシントンポストが機密文書をどう扱うかという葛藤がリアルに描かれていました。今の日本にも共通するテーマで国家権力と報道の在り方を問い、見応えのある作品でした。

## ビッグ・シック ぼくたちの大いなる目ざめ

マイケル・ショウォルター監督



パキスタン出身の男性コメディアンとアメリカ人女性のカップルが、結婚に向けて文化の違いによる数々の障壁を乗り越えていくさまを、実話をもとに描いたコメディドラマ。

登場人物それぞれがユニークで、なおかつ人物描写がいいのです。クメールとエミリーというキュートなカップルのロマンスと、2人を取り巻く家族が描かれます。脚本はクメールが書き、本人が演じています。

一度は別れてしまう二人ですが、エミリーが原因不明の病気で意識不明になるところから、新しい展開になります。病室に見舞うクメールはエミリーの家族に最初はケンもホロロな扱いを受けますが、徐々に理解されるようになります。私は病名は違うけど、夫が突然の入院を告げられ手術に至った頃を思い出してホロリとしました。エミリーの命の危機を一緒に経験していなかったらふたりの間に信頼関係が築かれることもなかったかもしれません。

肌の色だけでテロ扱いされる差別や偏見。イスラム教を信じる家族の伝統とアイデンティティ。そしてエミリーの病気。重い問題と闘いつつ、なんとか道を拓こうとするクメール。でも決して暗くはならないのです。物語全体を包むユーモラスなトーンに引き込まれました。しかも現実にあったことだからでしょうか、クメール以外の登場人物もみな、リアルで生き生きしています。とくにエミリーの両親の人間味あふれる人柄が、さすが。「この親にしてこの娘あり」と納得しました。エミリーの率直さも大好きです。ラストに思わず嬉し泣きしました。

肌の色だけでテロ扱いされる差別や偏見。イスラム教を信じる家族の伝統とアイデンティティ。そしてエミリーの病気。重い問題と闘いつつ、なんとか道を拓こうとするクメール。でも決して暗くはならないのです。物語全体を包むユーモラスなトーンに引き込まれました。しかも現実にあったことだからでしょうか、クメール以外の登場人物もみな、リアルで生き生きしています。とくにエミリーの両親の人間味あふれる人柄が、さすが。「この親にしてこの娘あり」と納得しました。エミリーの率直さも大好きです。ラストに思わず嬉し泣きしました。

## 馬を放つ

アクタン・アリム・クバト監督



「馬は人間の翼である」とは、中央アジアのキルギスに住む遊牧民族の間に伝えられることわざです。村

人からケンタウロスと呼ばれる男は馬で草原を駆け、その喜びを両手を広げて表します。

彼はろうあ妻と、言葉を発することができない5歳の息子と貧しいけれど仲良く暮らしています。

騎馬遊牧民を先祖に持ち、キルギスに古くから伝わる伝説を信じる彼は、人々を結びつけてきた信仰が薄れつつあることを感じ、夜な夜な馬を盗んでは野に解き放つのです。ある日、馬を盗まれた権力者が、犯人を捕まえるべく畏を仕掛けます。捕まったケンタウロスは夢に見た話をします「はるか昔、馬は人間の友人ではなかったか、人は勝手に自然を破壊し馬を大事にしなくなった」と。かつて馬と共存し、暮らしをともにした仲間たちが押し寄せてきた資本主義の影響で、次第に遊牧民本来の誇りを忘れ去っていくことを心から憂えるのです。

日高で農業を営んでいた祖父は、農耕馬を愛し大切にしていました。ある日放牧していた馬の一头が、帰ってこなかったことがありました。祖父は夜なのに懸命に探し、見つけたのです。その喜びようは、迷子になった我が子を探し当てたかのようなようでした。競走馬ではないけど、祖父の馬はどの馬も美しかったことを思い出して、懐かしい想いに満たされました。

天山山脈のふもとに広がる草原の国キルギスが美しく、自然光で撮影された映像は郷愁を誘います。馬が大地を自由に駆け、数多くの馬が川を渡るシーンが圧巻です。「14歳で自分の馬を持って駆けていた」と語る映画監督が自ら主人公を演じ、近代化によって貧富の差が拡大し、昔ながらの文化や価値観、人とのつながりが希薄になっていることへの悲しみを伝えてくれる一作です。

## ロンドン、人生はじめます

ジョエル・ホブキンス監督



ロンドンの高級マンションで暮らす未亡人のエミリー（ダイアン・キートン）は、森の中の手作りの小屋に17年間暮らしているドナルド（ブレンダン・グリーンソン）と出会い、つつましく

自給自足の暮らしを楽しむ彼に次第に惹かれていきます。

ドナルドは国立公園で暮らすホームレスでした。開発予定地を不法占拠していると、業者から嫌がらせをされている彼は、エミリーや、周囲の人に助けられて裁判に臨みます。

夫の残した借金や、気の進まない近所づきあいに疲れていたエミリーは、ドナルドと出会って変わっていきます。人生をやり直すのに年齢は関係ないのですね。

エミリーを演じたダイアン・キートンが若々しくチャーミング。センスが良くてお洒落。チャレンジ精神を忘れない生き方をするエミリーの心の柔らかさを見習いたいと思いました。

女は二度決断する

ファティ・アキン監督



トルコ移民の男性と結婚し一男をもうけたカティア（ダイアン・クルーガー）が、白昼起こった爆発事件

に巻き込まれ、夫と息子を失い、いきなり幸福の絶頂から絶望の底に突き落とされます。物語は、憎しみと絶望を抱えるカティアが下す「決断」に迫っていきます。圧倒的なリアリティと緊張感に包まれ、手に汗を握り、息を呑んで、予測のつかない展開を見守りました。

2000年から7年間にドイツの8都市で極右グループ、いわゆるネオナチが行った連続テロ事件。当初トルコ人同士の抗争を疑い、11年間もネオナチを捜査対象としなかったドイツ警察の対応は「戦後最大の失態」とまで言われたということも初めて知りました。その様子は劇中でも描かれています。また、ネオナチの冷酷さが、ありのままに暴かれる裁判シーンも衝撃的でした。恐るべきテロの実態に慄然としました。

どん底に突き落とされた女性の耐えがたい苦しみや喪失感、やがてその状態から奮い立ち、闘っていくさまを体現したクルーガーの演技が光ります。彼女は「彼らの声に耳を傾けて、心を開いて悲しみを感じた。これまでの人生で、あれだけ悲痛な気持ちを目撃することはなかったわ。頭の中に常に彼らの声が響いていた」とインタビューに答えています。

家族と過ごした楽しい時間と対比する、事件後の孤独感が、素晴らしい演出で描かれ、冒頭からラストまで目も心もスクリーンに釘付けになりました。カティアの二度の決断をどうぞ皆さんご自身の目で確かめてください。余韻のある音楽も心に残りました。

主演したクルーガーは母国ドイツ語での演技に挑戦し、第70回カンヌ国際映画祭主演女優賞を獲得しました。

## 次号は30周年記念号、是非寄稿をお願いします

「銀河通信」を創刊したのは1988年7月10日でした。次号208号で30周年になります。1986年に起きたチェルノブイリ原発事故に衝撃を受け「原発のない社会で暮らしたい」と強く思いました。親しい友人に小さな声を届けることを始めました。当初の読者は20人でした。「銀河通信」を通して、平和や原発や自然保護の仲間、人権問題にも関わるようになりました。印刷読者とWeb読者で600人近くになりました。

是非、読者にとっての30年を書いていただけないでしょうか。次号の記念号に掲載したいと思います。500字から1000字以内で、風景など文章にふさわしい写真もお願いします。

7月23日は私の誕生日も迎えます。少し疲れてきましたが、みなさまからエネルギーを頂けたらと思います。締め切りは6月25日までをお願いします。

### シリパ山((295.8m)に登りました



5月10日山の仲間と8ヶ月ぶりに登山しました。余市のシリパ山です。295.8mの小さな山でしたが急登の連続でし

た。シリパ山はアイヌ語で「海中に突き出す山の頭」という意味です。頂上からはそのとおりの絶景が広がり、命の洗濯ができました。



購読料と寄付ををありがとうございます  
(敬称略) 4.4~5.18

三島春光/仲俣善雄/菅邦子/高畠拓生/篠田江里子/高橋雋/竹内修一/川崎剛/瀬尾英幸/安川誠二(著書も)/中村秀子/三浦恵美子/反橋一夫/齊木登茂子/竹田とし子/松川洋子/富盛保枝/伊藤誠一/中島圭子/小野利和(著書も)/岩井善昭/さかい廣/神原照子/小松知己/佐藤正人/黒田忠/和田マサコ 合計74,500円は、印刷と送料に使わせていただきます。ありがとうございます。今回はWeb読者からも寄付を頂きました。振り込まれる方は2年分とか購読料プラス寄付と書いて頂けると助かります。年間1000円の購読料は変わりませんが、多くの方が寄付も加えてくださっているおかげで、ここ1年は赤字にならずに発行が出来ます。引き続きご支援をお願いします。